

『マリッジブルーマウンテン』

応募者 緒方一智

あらすじ

婚約者が探偵になりたいと言い出し、マリッジブルーな聡美が山へ登るとある犬と出会う。その犬は特別臭覚がよく、婚約者の依頼された仕事をどんどんと解決していくことになるが、次第に懐かなくなり、仕事をこなせなくなってしまう。けれども探偵として本当にやりたかった人助けの仕事が舞い込み、

本編の字数 5000字

主なシーン

主人公のアパート

山

喫茶店

街と道が数ヶ所

本気で言ってるの？ 数ヶ月前に愛を口にした時と同じ表情で恋人の田所悠也は夢を語っていた。私はもう氷しか残っていないアイスコーヒーのグラスを両手で握り必死に冷静を保とうとした。

「本気で言ってる。俺を信じて欲しい」

そう言っ、田所は鞆から一枚のチラシを出した。昭和レトロなデザインの真ん中にブルーのゴシック体で『田所探偵事務所』と書かれている。

「探偵なんて仕事になるわけじゃないじゃん」

「やってみなきゃわかんないじゃん」

「いやわかるよ！」

数年前に、私はこの田所という男に告白をされた。たいしてかっこいいとも思わないし、趣味が合うわけでもなかったが、何故か一緒に居ると安心した。こういう気持ちにパートナーにもっとも大切な気がして付き合いはじめ、数ヶ月前に結婚を申し込まれた。私の賃貸の部屋の更新月に解約をして一緒に住もう、そして結婚しよう。そんな話をした。両親にも会わせたし田所の両親にも会った。田所は低収入ではあったが、安定した保険会社の営業をしていたし、私が理不尽なことを言っても怒らない。いい夫になるような気がしていた。そんな彼から探偵になりたいなんて言葉が出てくるなんて思いも寄らなかった。

私は千円札を置き、少し独りで考えたいと言って喫茶店をでた。家に戻ると枕で口を塞ぎながら大声でストレスを発散させる。どうしていいかわからない時は大抵このような行動をしてしまう。それでも気持ちが切り替えれない時は旅にでた。知らない街を歩くと気分が晴れる。けれど、田所探偵事務所の件はその程度で晴れる憂鬱ではなかった。

私は大きなリュックに取り出し、キャンプ用具を詰め始めた。仕事帰りに登山用品店によく寄って、使わないだろうなと思いつつもキャンプ用具を買っていた。いつだってキャンプできるといふ状態にあること、現実逃避ができることがストレス発散だったからだ。会社で嫌なことがある度にキャンプ用具が増えていた。しかし結局一度日帰りで独りバーベキューをしたくらいでほとんどのモノは新品のままだった。けれど今日は初めてテントを使って泊まろうと思った。それくらい、私のマリッジブルーは深い青だった。

青梅線の終点からバスに乗り、鴨沢で降りて雲取山という山を目指した。下山するハイカーたちは挨拶をし、今から登るのかと、心配をしてくれるが、そ

の善意の声にすらイライラしてしまうくらい独りになりたかった。

私は登山道を外れ脇道へと入った。迷子になってもこの道に戻ればいい。ほんとうの独りになりたかった。歩き続けると、あつという間に暗くなり、怖くなった。帰り道がわからず朝を待つことにした。一人で持ち運べるくらい簡単な頼りないテントを平たい場所をみつけてはった。携帯電話の電波はない。

夜が深くなるにつれて獣がたてる音が大きくなる気がした。すぐそばにも熊がいるかもしれない。私はリュックからウルフピーを取り出した。それはほぼ狼のおしっこでできている液体だ。狼は強い生き物なので、撒くと他の動物が寄ってこないのだという。にしてもこんなものまで買っていたことに自分でも驚いた。会社でよっぽど嫌なことがあったのだろうと思ったがそれがなんだったかは思い出せなかった。

ウルフピーは強烈に臭くて寄ってこないだけじゃないのかというくらい異臭を放ち、私はテントのなかに避難した。

私は恐怖と異臭が渦巻く闇のなか眠ることにしたが寝心地も悪く、一睡もすることなく朝を迎えた。テントの透過して届く朝日に感謝をした。

テントの外にでると、一匹の犬？ がいた。驚いたが怖くはなかった。何故ならその犬？ は綿菓子のように白い毛を蓄え、優しそうな表情でお座りをしてじっと私を見てたからだ。

テントを片付ける私を見守っている。なんだこいつ。私は片付けを終えるとその犬？を一瞥して山を降りた。

数時間かけてアパートに戻るとお風呂に浸かり、ぐっすりと寝た。目が覚めると夕暮れで、チャイムの音で目が覚めた。出ると田所がいた。

「いたんだ」

「え、いるよそりゃ、私の部屋だもん。なに？」

「メールも返してくれないし、電話も全く出ないし心配してたんだ。で、ちょっと相談があつてさ、入っていい？」

起こされて気分は良くなかったが、田所が困った顔をしてたので中に入れることにした。すると一緒に変な生き物が入ってきた。

「え、ちょっと」

それは山で見た犬？ だった。

「なんかずっと玄関の前にいたけど」

「え、だからってちょっと勝手に入れないですよ」

すでに犬？ はリビングへと歩き、お座りをして待っていた。

私は仕方なく、犬？ の横に座った。

「サモエドだね」と田所が言った。

「詳しいんだ」

「まあ探偵だからね」

と言われ、こいつが探偵になると言ったのを思い出した。

「その、探偵についてなんだけどさあ、やっぱり私には受け入れられないかもしれない。夢か結婚どちらか諦めてよ」

「聡美は勘違いしている。探偵って殺人事件とかだと思ってるでしょう？ けどほとんどが浮気調査、人探しやストーカーとか盗聴とかねそういうのばかりなんだ。でき、早速仕事の依頼が来てちよっと聞きたいことがあって」

と田所は私のマリッジブルーな言葉には触れずに話を続け、鞆からジップロックにはいったシャツと写真を取り出した。依頼人はお金持ちの主婦で、旦那のシャツから女の匂いがして、肩にうっすらと口紅のような赤が残っているのを発見したのだという。問い詰めても口を割らないが、確実に浮気をしているからその証拠を見つけて欲しいと言われたのだという。写真にはこの為に使われているとは知らずににっこりと笑顔を作った旦那が写っていた。

「で、聡美は美容部員で働いてるし、香水詳しかったじゃん、この口紅も何か知らない？」

「知らないよ、わかるわけないじゃん。ていうかそんな不潔なもん持つてくるなよ」

「やっぱりそうだよね。ていうかなんか香水の匂いもわからないくらいこの部屋臭くない？」

田所はサモエドの匂いを嗅いで、違うなあ、と小さく呟き、私を嗅いで固まった。

「え、なに私？ 突然きて失礼すぎるでしょ。ていうかさあ、探偵の話の前に結婚の話でしょ。生活とか、どうすんのさ」

「だから探偵を仕事にして安定した生活を」

「安定なんかしないから言ってるの、具体的な話をしようよ、どうするの、お金ないと生活できないよ？」

「じゃあ俺が300万貯金できたら結婚というのはどうだろう？」

「いまいくらあんの？」

「その、探偵業始める経費があれで、あの、12万くらい」

「別れましょう」

と私は田所を追い出した。

田所がアパートの階段を降りるのを確認するまで玄関にいと、サモエドが寄ってきた。

「どこから来たか知らないけどお前も帰りなよ」

サモエドが出ていく気配はなく、私を見つめながらお座りをした。私は無理やり外へと追いやろうとするがその姿を隣に住んでるおばさんがじつと見ていた。

「違うんです。ペット禁止なのはわかってるんですけど急に入ってきたんです」

「あらそうなの」

「困ったもんですね、首輪もしてないんで野良の迷子かなあ」

無言でおばさんは私を見続けた。私は気まずくなって、サモエドを抱きかかえてアパートをでることにした。

街を歩きながら、私はサモエドに話しかけた。

「お前どうすんのこれから。まあ私もか。あいつと結婚なんてほんとに想像できないよね？ 旦那が探偵って友達とか親に恥ずかしくて言えないよね？」

するとサモエドは急に暴れて私の胸から飛び出し、路地裏へと歩き出した。

「ちよつと、そっちはエロい店があるところだから散歩コースにはハードすぎるから！」

私が追いかけると中年カップルがラブホテルから出てきた。

男の方は田所が見せた写真の男にそっくりだった。

そのカップルはさも隠していることがあるように顔を下げ歩いていく。私は二人の写真を撮り、田所に送った。するとすぐにそれが探していた浮気してる旦那だと連絡がきた。田所は依頼主に写真を送り、即日解決したのだった。

その仕事の早さからあつという間に口コミで田所のところにたくさんの浮気調査の依頼がきた。匂いの残っているものをサモエドに嗅がせて、散歩をするのすぐに見つかる。いつの間にか田所探偵事務所は有名になった。自分の手柄のようにしている田所はムカつくがお金は稼いでいるらしかった。そして一つ気づいたことがあった。サモエドが私に懐いてるのはどうやら狼のおしっこの主に惚れているからであった。山に登った時撒いたウルフピー、その匂いが私

からすると従順だった。そのシステムに気づき、平日は田所にウルフピーをつけサモエドと浮気調査をし、私も休日には探偵を手伝うことになった。サモエドがいると仕事はすぐに結果をだしたが、しばらくするとウルフピーは無くなってしまった。他のウルフピーを買うがサモエドは威嚇するばかりで懐いてくれなかった。すると仕事が捗らずに、田所の仕事はあつという間に無くなっていった。ついには隣のおばさんにも怒られサモエドをアパートで飼うことができなくなってしまう。田所のアパートもペット禁止なので、私は仕方なくサモエドと別れることにした。公園で首輪を外し、「ごめんねもう飼えないんだよ」というと空気を讀んだかのようにサモエドはどこかへと去っていった。

それからサモエドのいない生活を続けた。田所の貯金はあつという間に消えていき、私たちは別れ話をした。田所に別れたいと告げると、ちゃんと就職するから待ってほしいと言われた。ただ、最後に1つだけ探偵の仕事がしたいと田所は言った。今日、行方不明の女の子を探して欲しいという依頼があったらしい。昨日ピクニックに出かけた家族の娘である森下夏帆ちゃんがいなくなったのだという。警察や捜索隊も動いているが子供の体力を考えると少しでも早く見つけてあげたい、だから即日解決で有名だった田所にも話がきたのだという。

田所は夏帆ちゃんの普段着てる服を借りたが、サモエドはいないことはわかっていった。「どうするの?」とたずねると、「自分で探す」と田所はいった。そして続けて「浮気調査なんかじゃなくて、本当は人の助けになることがしたかったんだ」と言った。田所が独りで解決できるわけがない。仕方なく、私も手伝うことにした。

夏帆ちゃんが居なくなった公園から繋がっている山がある。私たちはさっそくその山に登り、捜索隊と一緒に夏帆ちゃんを探した。山で夜を過ごす怖さを知っている。私は早く夏帆ちゃんを見つけてあげたかった。

「夏帆ちゃん」と叫ぶ声が聞こえ、私たちも真似をして名前を呼びながら探索を続けた。

空が薄暗くなると「君たちはもう戻りなさい、危ないですよ」と捜索隊の人に声をかけられた。田所は戻ろうと言うが、私は森の奥へと歩いていった。早く助けてあげなくちゃ。私は焦る気持ちと暗くてわからない道に転がり落ちてしまった。田所が慌てて私のそばへと降りてきた。

右足が動かせなかった。おもわず私は「大丈夫じゃねーよ。大丈夫なわけな

いじゃん」と泣き叫んだ。怖くてたまらなかった。田所と歩いていた一歩先も不確かなこの道がまるで人生みたいで、ほらやっぱり痛いじゃん、怪我したじゃんと思いい涙が止まらなかった。

泣きわめく私に田所は戸惑っていた。突然涙を伝う頬を舐められた。目をあけるとサモエドがいた。声に反応してどこからか来てくれたようだった。田所も驚き、私は田所に夏帆ちゃんの服をかがせるように言った。サモエドは匂いを嗅ぐと森の奥へと進んでいった。心配そうに私を何度も振り返りながら田所はサモエドについていった。そしてしばらくすると夏帆ちゃんを連れて田所たちが戻ってきた。夏帆ちゃんを捜査隊へ預けると、私はくじいた足を手当してもらい車でアパートの近くまで送ってもらった。

車を降り、歩き出すと、痛みが走り私は顔を歪めた。その歪んだ表情を見て、田所が私をおんぶしてくれた。おぶられながらアパートに帰るとポストにアパート管理会社から封筒が届いていた。

階段を上りながら田所は「きつつ」と言う。

「がんばれー」と言いながら私は封筒をあける。

「あー来月更新かあ、更新料払うの嫌だなあ」

そう呟くと、田所は息を切らしながら「一緒にベット可のところに引っ越そうよ」と言って階段を上り続けた。そしてサモエドは嬉しそうに尻尾を振って、ワンと吠えた。

〈了〉